

6. 両生類

選定・評価方法の概要

東京都には2目6科10属15種の在来両生類の生息が確認されている。今回の改定では、15種すべてを検討対象種とした。なお、東京都に生息するヒダサンショウウオの集団は、2018年に独立種ヒガシヒダサンショウウオとして記載されたので今回の改定では種名を変更した。文献調査および実地調査に基づいて、検討対象種の生息状況を把握するように努めた。その際、分布域の特定や個体群密度の推定が可能な種については、定量的要件を用い、それが難しい種では定性的要件で評価を行った。

選定・評価結果の概要

サンショウウオ目では前回（本土部レッドリスト2010）同様、東京都に生息する4種すべてが本レッドリストの掲載種となった。カエル目についても東京都に生息している在来カエル類11種すべてが掲載種となった。

今回の改定で、前回より生息状況が改善した種もしくは地域はなかった。水田の減少、谷戸田の耕作放棄や乾燥化、アライグマやウシガエルなどの外来種による捕食、トウキョウサンショウウオで顕著な販売目的の採集、アズマヒキガエルで確認された他亜種との交雑など、様々な要因によって東京都の両生類の生息状況は悪化しており、前回よりランクを上げなければならなかった種は5種9地域となった。

本改定において定量的要件で評価できたのはトウキョウサンショウウオのみであった。本種については最近20年間のモニタリングデータから30年間（3世代時間）の個体群衰退を推定した。その結果、30年間（3世代時間）で繁殖地の50%弱が消失し、さらに残った繁殖地でも個体群サイズの縮小が進み、東京都全体で総産卵メスの個体数は50%強程減少したと推定された。同じように止水で繁殖するアカハライモリでも個体群サイズの縮小の状況はトウキョウサンショウウオと変わらないと推定される。一方、西多摩の山地溪流で繁殖するハコネサンショウウオでは一部の地域を除き大きな変化はないように見えるが、ヒガシヒダサンショウウオについてはインターネットを経由した販売目的の採集や写真撮影のための観察会による環境かく乱が個体群の存続を危うくさせる要因となりつつある。なお、絶滅危惧ⅠA類と判定されたのはトウキョウサンショウウオ（北多摩）とアカハライモリ（区部）の2種2地域であった。

カエル目では、溪流性のカジカガエルやタゴガエルなどのランクは前回と同じとなった。一方、水田の減少傾向が続いていることを受けて、地域によっては水田に依存するトウキョウダルマガエル、ニホンアカガエル、ヤマアカガエルのランクが上がった。また、前回、区部のみ準絶滅危惧とされたアズマヒキガエルは、ニホンヒキガエルとの交雑や繁殖地の減少を受けて、すべての地域でランクが上がることになった。

以下、地域区分ごとの評価について概観する。区部は水田や自然湿地が極端に少なく、両生類の生息地は河川敷や水辺公園などに限定される



トウキョウサンショウウオ 卵嚢



カエル類の良好な生息環境となる水田環境（あきる野市）

が、その何れもが小規模で孤立している。また、前回改定の際に指摘されたウシガエルの分布拡大は継続しており、さらに国内外来種であるヌマガエルの侵入定着が新たに確認され、在来種に悪影響を及ぼしている。前回と評価が変わったのは、ニホンヒキガエルとの交雑が明らかとなったアズマヒキガエルだけである。しかし、それ以外の種の生息状況が厳しいことには変わりなく、特にツチガエルとサンショウウオ目で唯一区部に生息するアカハライモリについては、信頼できる生息情報がなく、すでに絶滅した可能性も否定できない。

北多摩は区部に次いで生息環境が悪化している。狭山丘陵にはトウキョウサンショウウオが現在も生息するが、最近数年間で特に激しく衰退し、30年間に88%減少したと推定され、東京都内でも本種の絶滅が最も危惧される地域である。カエル類では、ニホンヒキガエルとの交雑が確認されたアズマヒキガエルの評価が前回のランク外から絶滅危惧Ⅱ類に変更された。また、トウキョウダルマガエルは、既知の生息地が僅かとなったために絶滅危惧ⅠA類となった。

南多摩には良好な丘陵地が残されているが、水田の減少、休耕田の増加は続いている。サンショウウオ目の評価には変化がないが、八王子市西部のヒガシヒダサンショウウオの生息環境は現在良好な環境とは決して言えず、生息分布の縮小が続いている。特に高尾山周辺では最近30年間程生息情報がほとんどない。アズマヒキガエル以外のカエル類の評価は前回と同じとなった。アズマヒキガエルについては繁殖個体数の減少が著しい上、ニホンヒキガエルとの交雑も懸念されることから絶滅危惧Ⅱ類になった。

西多摩は今回の改定でランクが変更された種が多くなった。ハコネサンショウウオやナガレタゴガエルなどの山地性の両生類は前回と同じランクに留まった。ただし、ヒガシヒダサンショウウオは前回の準絶滅危惧から絶滅危惧Ⅱ類となった。一方、トウキョウサンショウウオのランクに変更はないものの、基準産地であるあきる野市・日の出町の丘陵部でも他地域と同様に谷戸田の乾燥化が進み、アライグマによる捕食、人による採集などで、30年間で本種の個体群が40%強に衰退したと推定された。カエル目ではニホンアカガエルが絶滅危惧Ⅱ類から絶滅危惧ⅠB類へ、ヤマアカガエルが準絶滅危惧から絶滅危惧Ⅱ類へ、それぞれ引き上げられた。前回ランク外であったアズマヒキガエルは、繁殖地の消失が相次いでいるという報告を受けて、準絶滅危惧とした。

各地域区分の評価を総合的に検討し、東京都全体としての評価を行った結果、サンショウウオ目では、絶滅危惧ⅠB類2種、絶滅危惧Ⅱ類1種、準絶滅危惧1種、カエル目では、絶滅危惧ⅠB類2種、絶滅危惧Ⅱ類2種、準絶滅危惧7種となった。すなわち、東京都に生息する両生類はすべて準絶滅危惧以上と評価された。

（福山 欣司・草野 保）

写真提供者

（有）ゼフィルス



交雑が懸念されるヒキガエル類の幼生

トウキョウサンショウウオ

Hynobius tokyoensis

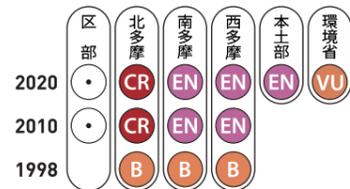
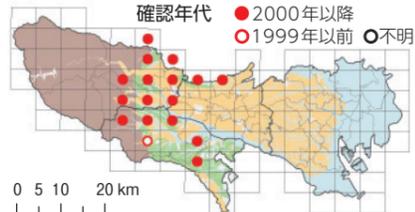
有尾目
サンショウウオ科

■ **種の特性と生息状況**：全長は8～13cm程度。体色は黄褐色から黒褐色まで変異に富むが、暗褐色のことが多い。体側や腹には青白色の小点が密に分布する個体が多い。山間の水田や湧水の溜まり水で2～4月頃繁殖し、変態後は周囲の森林の林床に分散し主に地中で生活する。関東地方の千葉県・神奈川県・東京都・埼玉県・栃木県に分布する。茨城県・福島県・栃木県東部の集団は2022年にイワキサンショウウオとして新種記載された。都内では多摩地区の標高100～300mまでの丘陵地が主な生息地となっている。

■ **生存を脅かす要因**：多摩地区全域で急速に産卵場が減少し、存続している産卵場でも繁殖個体群サイズが縮小している。原因としては、宅地開発・道路建設等の各種開発による生息環境の消失、谷戸田の管理放棄による湧水の減少・枯渇による産卵環境の劣化、アライグマ・アメリカザリガニなどの外来種による卵および繁殖個体への捕食、ペット業者などによる販売目的の採集などが考えられる。

■ **特記事項**：あきる野市草花丘陵が基準産地。2020年2月より環境省による特定第二種国内希少野生動物種に指定され、販売・頒布を目的とした個体の捕獲等が規制されている。

執筆者 草野保 文献一覧 4, 7, 13, 20



日の出町 2009年

ヒガシヒダサンショウウオ

Hynobius fossigenus

有尾目
サンショウウオ科

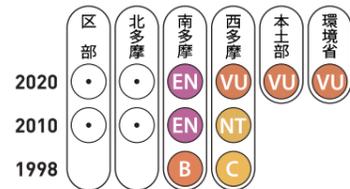
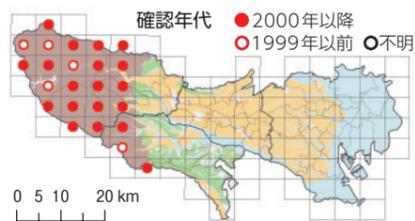
■ **種の特性と生息状況**：全長12～18cm程度。体は太く胴は長く、尾は円筒形で太い。背面は紫褐色で黄色の斑紋がある美しいサンショウウオである。山地溪流の源流近くで2～5月頃産卵し、幼生の多くはそのまま越冬し、翌年初夏に変態して上陸する。愛知県東部から東京都・埼玉県西部の山地の落葉広葉樹林・混交林・針葉樹林に分布する。都内では八王子市西部以西の標高240～1300mの山地に生息する。

■ **生存を脅かす要因**：人里はなれた溪流付近に生息するため、他の平地性の種に比べて絶滅のリスクは今のところ低いが、森林伐採・河川開発などに伴う砂防堰堤・林道工事などにより繁殖場所である山間の溪流上部の支沢の環境悪化が個体群衰退の主因と考えられる。その他、最近では売買や撮影目的の採集も大きな脅威となっている可能性がある。

■ **特記事項**：東京都における本種は以前ヒダサンショウウオとされていたが、2018年に愛知県東部から関東西部までの集団は新種として記載された。本種の基準産地は西多摩の日の出町である。

執筆者 草野保

文献一覧 6, 13, 21



奥多摩町 2010年

ハコネサンショウウオ

Onychodactylus japonicus

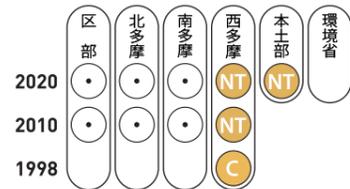
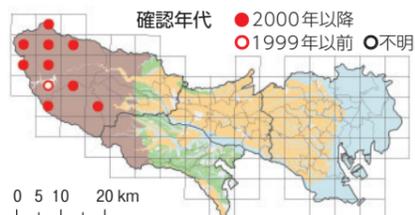
有尾目
サンショウウオ科

■ **種の特性と生息状況**：全長は11～17cm程度。体は細く尾が長く、眼は頭部から突出している。背面の体色は変異が大きく、紫色を帯びた暗褐色で中央に縦条や斑紋が見られる。日本のサンショウウオ類の中で最も溪流に適応し、肺を持たない種。主に初夏にがれ場や源流部の湧水が湧き出す穴の奥の地下で産卵する。そのため産卵場の発見は困難である。変態上陸まで3年程要すると思われる。新潟県中北部までの本州の山地に広く分布し、都内では奥多摩町・檜原村の標高500m以上の森林に生息する。

■ **生存を脅かす要因**：山奥の溪流で繁殖し近接した森林で生活するため、比較的人間の活動によるかく乱を受けにくい、森林伐採や河川開発に伴う林道建設・砂防堰堤工事等によるかく乱には弱い。また、温度変化には弱い、今後気候温暖化の影響が危惧される。

■ **特記事項**：近年ハコネサンショウウオは分類的解析の結果、5種があらたに記載され6種に分離されたが、東京都の集団には変更がない。

執筆者 草野保 文献一覧 6, 13, 18



檜原村 1999年

アカハライモリ

Cynops pyrrhogaster

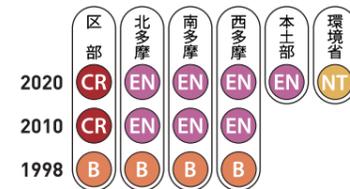
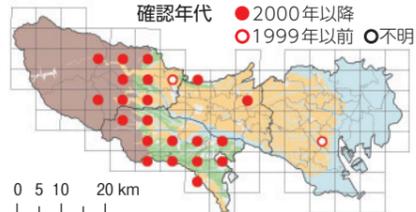
有尾目
イモリ科

■ **種の特性と生息状況**：全長は7～14cm程度。背面の体色は黒く、腹はオレンジ色から赤色。腹には多様な黒い斑紋が見られる。サンショウウオ類とは異なり体内授精を行う。池や田んぼなど止水で秋と春に求愛行動が見られ、主に4～6月頃産卵を行う。幼生は秋までに変態上陸し、3歳頃性成熟し繁殖に参加する。成体は安定した池などでは年中水中で姿を見られる。本州、四国、九州と佐渡、淡路島、奄岐などの島に分布する。都内では主に西多摩・南多摩の標高300m以下の山地・丘陵および平地の止水とその周囲の森林に生息する。

■ **生存を脅かす要因**：23区内では現在ほとんど確実な生息情報がなく、絶滅の可能性も高い。その他の地区でも、各種開発による池や水田などの止水環境の急速な消失により個体群が絶滅した。また、ペット業者などによる採集も脅威となっている。成体が年中水場に留まるため、捕獲が容易なことも採集による脅威を大きくしている。

■ **特記事項**：生息状況の情報が乏しく、定量的な評価が十分できていない。

執筆者 草野保 文献一覧 5, 8, 13, 14



八王子市 2002年

アズマヒキガエル

Bufo japonicus formosus

無尾目
ヒキガエル科

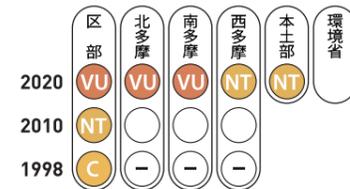
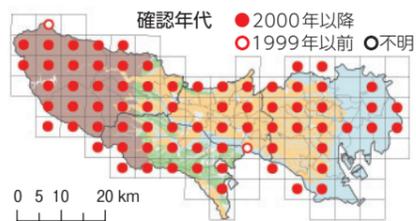
■ **種の特性と生息状況**：ニホンヒキガエルの亜種で、近畿地方の日本海側の一部と東海地方以北の本州に分布する。都内では、区部から西多摩の山間地まで広く分布する。伊豆諸島に人為分布している。体長は40～165mm。日本産のカエルとしては大型である。四肢は比較的短く、指端に吸盤を持たない。鼓膜上後部に発達した耳腺、背面や側面に大小様々な隆起を持つ。体色は灰暗色から茶褐色で個体変異が大きい。人家の庭先や森林の林床などに生息し、昆虫などの小動物を捕食する。

■ **生存を脅かす要因**：郊外における宅地開発、23区内での再開発に伴う緑地の改変や減少、繁殖期における移動個体の交通事故、圃場整備や休耕田化による水辺の減少などの他、アライグマによる捕食被害も報告されている。また、区部や北多摩などでは人為移入された亜種ニホンヒキガエルとの交雑が起こっており、遺伝子汚染が懸念される。

■ **特記事項**：繁殖期以外はほとんど水辺に近寄らず、乾燥にも比較的強い、都心の人家や寺社などの敷地にある小さな緑地に生息している。

執筆者 福山欣司

文献一覧 1, 2, 9, 10, 11, 12, 15, 16, 19



東京都 2008年

ニホンアマガエル

Dryophytes japonicus

無尾目
アマガエル科

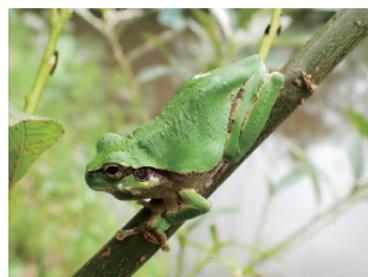
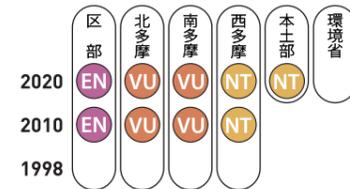
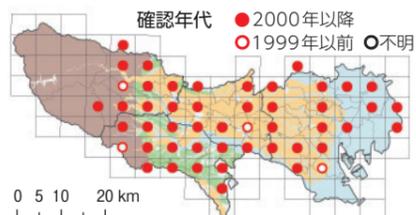
■ **種の特性と生息状況**：北海道、本州、四国、九州の広い範囲に分布する。都内のすべての区分に分布する。八丈島に人為分布している。指端に吸盤を、趾間にみずかきをそれぞれ持つ。前肢のみずかきはほとんど発達していない。背面の皮膚は平滑で隆起などは見られない。背面の体色は緑黄色から灰色まで変化する。鼻孔から眼の前端および眼の後端から鼓膜にかけて黒色の縦条がある。成体は主に樹上で生活し、昆虫類やクモ等の小動物を捕食する。

■ **生存を脅かす要因**：主な繁殖場所である水田の急激な減少、圃場整備による水環境の変化、交通事故、市街地開発、休耕田の増加（管理放棄）、アライグマによる捕食被害、農業汚染や中干しによる幼生の減少などにより生息数が減少している。

■ **特記事項**：九州以北に分布するカエルの中ではもっとも小型である。成体の生息は水田に依存しないが、繁殖場所として水田の依存度が高い。そのため、都内の水田の減少が本種の大きな減少要因となっている。

執筆者 福山欣司

文献一覧 1, 2, 9, 10, 12, 15, 16



八王子市 2020年

タゴガエル

Rana tagoi tagoi

無尾目 アカガエル科

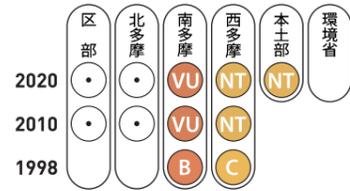
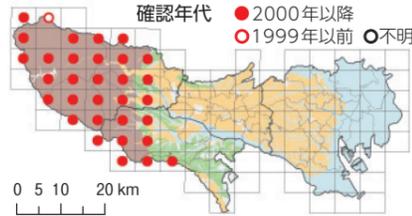
■ **種の特性と生息状況**：本州、四国、九州に分布する。都内では、南多摩と西多摩の山間地に分布する。体長は30～58mm。指端に吸盤を持たない。後肢趾間にみずかきを持つ。眼上部後方から後肢基部にかけて背側線隆条がある。背側線隆条は鼓膜後方で外側に折れ曲がる。体色は茶褐色から赤褐色で、鼓膜周辺は暗黒色を呈す。成体は昆虫等の小動物を食べる。普段は森林の林床などに生息するが、繁殖期には溪流の上流部の伏流水が流れる転石や岩の下に産卵する。

■ **生存を脅かす要因**：森林伐採やそれに伴う林道開発、河川開発、繁殖に必要な湧水の減少、採石の他、林業衰退による山荒れなどにより、生息環境が悪化している。特に南多摩では生息域が狭いため、影響が顕著に現れる。

■ **特記事項**：同所的に生息するナガレタゴガエルと形態が極めて類似している。特に非繁殖期には写真などでの識別は困難。捕獲して後肢趾間みずかきの発達程度で判別する必要がある。

執筆者 福山欣司

文献一覧 1, 2, 3, 9, 10, 11, 12, 15, 16



東京都外 2018年

ナガレタゴガエル

Rana sakuraii

無尾目 アカガエル科

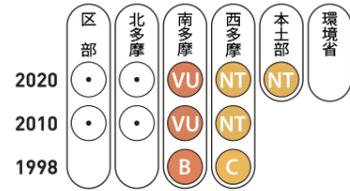
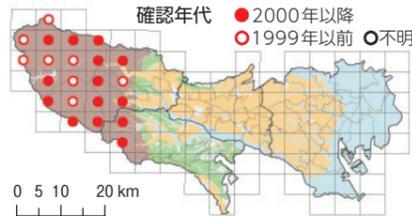
■ **種の特性と生息状況**：本州（関東から中国地方の一部）の山間地に分布する。都内では南多摩と西多摩の山間地に分布する。体長は38～60mm。指端に吸盤を持たない。後肢趾間に非常に発達したみずかきを持つ。眼上部後方から後肢基部にかけて背側線隆条を持つ。背側線隆条は鼓膜後方で外側に折れ曲がる。体色は茶褐色から赤褐色。繁殖期の雄は背面の皮膚が伸張して皺状になる。山間地の林床や溪流沿いに生息し、2月頃溪流の淵やよどみで産卵する

■ **生存を脅かす要因**：森林伐採やそれに伴う林道開発、林業の衰退による山荒れ、採石による溪流の汚濁（土砂の堆積）、濁水等が生存を脅かす要因となっている。

■ **特記事項**：30年ほど前に東京都で発見された溪流性のカエル。真冬に溪流の中で産卵する繁殖生態は世界的に見ても特異。本州に生息するカエルの中では分布域が狭く、東京都は本種の分布の南東限にあたる。

執筆者 福山欣司

文献一覧 1, 2, 3, 9, 10, 11, 12, 15, 16



あきる野市

ニホンアカガエル

Rana japonica

無尾目 アカガエル科

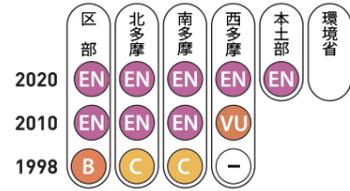
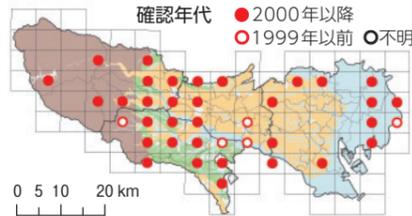
■ **種の特性と生息状況**：本州、四国、九州に広く分布する。都内でもすべての区分で確認されている。八丈島に人為分布している。体長は34～67mm。指端に吸盤を持たない。後肢趾間に発達したみずかきを持つ。体色は茶褐色から赤褐色で、鼓膜周囲は暗黒色を呈す。眼上部後方から後肢基部にかけて背側線隆条が伸びる。背側線隆条は途中で折れ曲がったり、途切れたりすることはない。山間地・丘陵地の林縁部や水田周辺の草地などに生息する。成体は昆虫類やクモ、ミミズなどを捕食する。都内では1月下旬から2月下旬に雨水の溜まった水田などで産卵する。

■ **生存を脅かす要因**：市街地開発、圃場整備による水環境の変化、休耕田（管理放棄）の増加、繁殖期の移動個体の交通事故、アライグマによる捕食被害、農業汚染や中干しによる幼生の減少等によって生息数が減少している。

■ **特記事項**：ほとんどの生息地において卵・幼生が水田内や水田脇の水路で成長する。そのため、水田の減少や乾田化の影響を受けやすい。

執筆者 福山欣司

文献一覧 1, 2, 9, 10, 11, 12, 15, 16



東京都外 2008年

ヤマアカガエル

Rana ornativentris

無尾目 アカガエル科

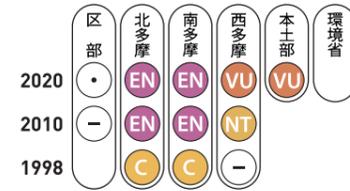
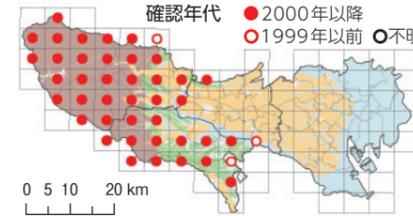
■ **種の特性と生息状況**：本州、四国、九州に広く分布する。都内では区部以外に分布する。体長は42～78mm。都内のアカガエル類の中ではもっとも大型である。指端に吸盤を持たない。後肢趾間に発達したみずかきを持つ。眼上部後方から後肢基部にかけて背側線隆条を持つ。背側線隆条は鼓膜後方で外側に折れ曲がる。体色は茶褐色から赤褐色で、鼓膜周囲は暗黒色を呈す。山間地や丘陵地の林床に生息する。ニホンアカガエルと同所的に生息することがあるが、本種の方がより森林性で、繁殖期を除くと、草地や水田付近に現れることは少ない。

■ **生存を脅かす要因**：森林伐採やそれに伴う林道開発、圃場整備による水田環境の変化、市街地開発、繁殖期の移動個体の交通事故、休耕田（管理放棄）の増加、アライグマによる捕食被害、農業汚染や中干しによる幼生の減少等により生息数が減少している。

■ **特記事項**：山間地では水田に依存しない個体群も存在するが、多くの生息地では、繁殖場所が水田である。そのため、水田の減少や水田の水環境の悪化の影響を受けやすい

執筆者 福山欣司

文献一覧 1, 2, 9, 10, 11, 12, 15, 16



八王子市 2009年

ツチガエル

Glandirana rugosa

無尾目 アカガエル科

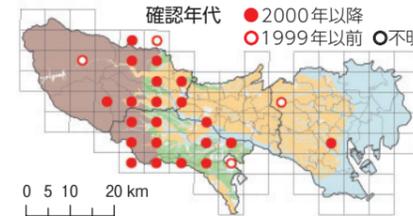
■ **種の特性と生息状況**：本州、四国、九州に広く分布する。北海道の一部に人為分布している。都内のすべての区分に分布するが、区部ではここ10年以上生存が確認されていない。伊豆諸島に人為分布している。体長は37～53mm。指端に吸盤を持たない。後肢趾間に発達したみずかきを持つ。背面には縦長の小隆起が多数散らばる。体色は灰褐色から暗灰色で目立った斑紋などはない。捕獲すると特異臭を放つ。山間地の小川や水路、水田や水田周辺の小規模で浅い水路などに生息する。成体は昆虫類やクモ等を捕食する。

■ **生存を脅かす要因**：圃場整備による水辺の消失、市街地開発、休耕田（管理放棄）の増加、アライグマによる捕食被害、農業汚染や冬季における水路の断水等により生息数が急激に減少している。

■ **特記事項**：本種は一生を通して水田や小川への依存度が高いため、圃場整備等の水田環境の変化に弱い。また、幼生が水中越冬するため、用水施設の合理化等により農閑期に水路の水がなくなることで幼生の減少を招いている。

執筆者 福山欣司

文献一覧 1, 2, 9, 10, 11, 12, 15, 16



八王子市 2002年

トウキョウダルマガエル

Pelophylax porosus porosus

無尾目 アカガエル科

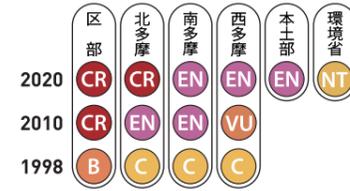
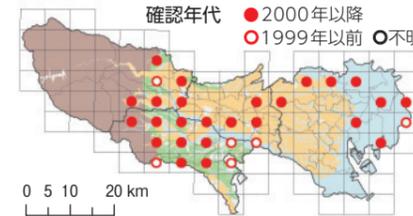
■ **種の特性と生息状況**：仙台平野と関東平野および長野、新潟両県の一部に分布する。北海道の一部に人為移入されている。都内ではすべての区分に分布している。体長39～87mm。指端に吸盤を持たず、後肢趾間に発達したみずかきを持つ。背面には、明瞭な背側線隆条があり、その間に縦長の細く浅い隆起が不規則に分布する。背面の体色は灰黒色や緑黄色が不規則に広がり、暗色の雲状紋が散らばる。明色の背中線を持つものもある。主に水田やその周囲の水路、浅い沼地、河川敷に形成された湿地などの水辺に生息する。成体は主に昆虫などの小動物を捕食する。

■ **生存を脅かす要因**：市街地開発、圃場整備による水環境の変化、休耕田（管理放棄）の増加、繁殖期の移動個体の交通事故、アライグマやウシガエルなどの外来生物による捕食、農業汚染や中干しによる幼生の減少等によって生息数が減少している。

■ **特記事項**：一生を通して水田に強く依存するため、水田の減少や休耕田化の影響を特に受けやすい。指端に吸盤を持たないため、U字溝などの障害物の影響を受けやすい。

執筆者 福山欣司

文献一覧 1, 2, 9, 10, 11, 12, 15, 16, 17



町田市 2020年

シュレーゲルアオガエル

Zhangixalus schlegelii

無尾目
アオガエル科

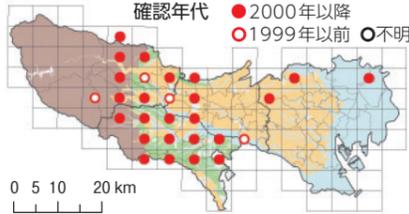
■**種の特性と生息状況**：本州、四国、九州に広く分布する。都内でもすべての区分に生息する。体長は32～53mm。指端に吸盤を持つ。趾間にみずかきを持つが、前肢のみずかきの発達が悪い。背面は平滑で隆起などは見られない。背面の体色は緑黄色で、まれに黄色の小班が散在することもある。繁殖期の夜間には体色が暗黒色に変化することがある。眼の虹彩は金色を呈す。山間地の開けた場所や水田の周辺、湿地、河川敷の草地などに生息する。成体は昆虫などの小動物を捕食する。

■**生存を脅かす要因**：市街地開発、圃場整備による水環境の変化、休耕地（管理放棄）の増加、繁殖期の移動個体の交通事故、アライグマによる捕食被害、農薬汚染や中干しによる幼生の減少等によって生息数が減少している。

■**特記事項**：ほとんどの生息地では、卵・幼生が水田内や水田脇の水路などで成長する。そのため、水田の減少や乾田化の影響を受けやすい。河川敷で繁殖する個体群もいるが、濁水や洪水などの影響を受けやすい。

執筆者 福山欣司

文献一覧 1, 2, 9, 10, 11, 12, 15, 16



モリアオガエル

Zhangixalus arboreus

無尾目
アオガエル科

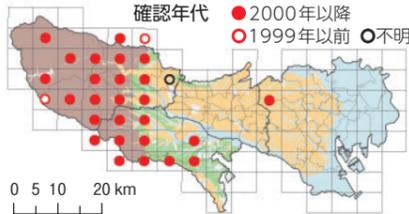
■**種の特性と生息状況**：本州の日本海側を中心に分布する。都内では区部以外に分布する。伊豆諸島の個体群は人為分布。体長42～82mm。日本産アオガエル科の中ではもっとも大型になる。指端に発達した吸盤を持つ。趾間にみずかきを持つ。背面の皮膚は平滑であるが、細かな顆粒に覆われるため光沢は少ない。背面の体色は緑色で、暗色または赤褐色の斑紋を有す個体もいる。眼の虹彩は赤みを帯びた光沢色を呈す。山間地や丘陵地の森林に生息し、繁殖期には池や沼などの岸際の樹上に泡巣状の卵塊を産む。

■**生存を脅かす要因**：森林伐採、市街地開発などの影響を受けやすい。都内の生息数は少なく、小規模な個体群が点在する状態と推定され、小さな環境変化でも影響を受けやすいと考えられる。

■**特記事項**：容姿の美しさや泡巣の珍しさから人為的に導入されやすい。都内でも移入個体が起源と推測される個体群が存在する。

執筆者 福山欣司

文献一覧 1, 2, 9, 10, 11, 12, 15, 16



カジカガエル

Buergeria buergeri

無尾目
アオガエル科

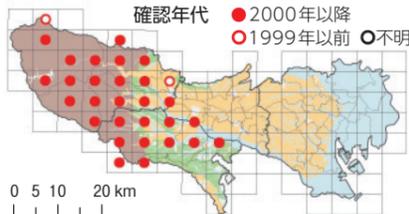
■**種の特性と生息状況**：本州、四国、九州に広く分布する。都内では区部以外に分布する。体長は37～69mm。扁平な体形で、指端に吸盤を持つ。趾間にみずかきを持つが、前肢のものは痕跡程度である。背面には小顆粒が散在し、ざらついた印象を与える。背面の体色は灰褐色から灰暗色で、緑色になることはない。背面中央に暗色の斑紋がある。山間部の渓流やその周辺の森林に生息する。

■**生存を脅かす要因**：森林伐採やそれに伴う林道開発、河川開発、土砂流失などの水質汚染などに影響を受けやすい。渓流の瀬にある転石の下などに産卵し、幼生も渓流内で成長するため、森林伐採や採石などにより河川に土砂が流入すると大きな影響を受ける。また、南多摩と北多摩では分布域が限られるため、生息基盤が脆弱といえる。

■**特記事項**：繁殖期に多摩川中下流域で雄の鳴き声を聞くことがあるが、それらは大雨などで流された個体と推定される。

執筆者 福山欣司

文献一覧 1, 2, 9, 10, 11, 12, 15, 16



区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
2020	CR	VU	VU	NT	NT
2010	CR	VU	VU	NT	NT
1998	B	C	C	—	—



2003年

区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
2020	●	NT	NT	NT	NT
2010	●	NT	NT	NT	NT
1998	—	C	C	C	—



青梅市 2010年

区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
2020	●	VU	VU	NT	NT
2010	●	VU	VU	NT	NT
1998	—	VU	B	C	—



八王子市 2010年

文献一覧

- 青梅自然誌研究グループ 編 (2008) 青梅市の両生類：青梅市両生類分布調査プロジェクト報告書。青梅自然誌研究グループ：92pp.
- 草野保 (2014) 第5節 両生類と爬虫類，八王子市史編集委員会編 新八王子市史 自然編：362-379. 八王子市.
- 草野保 (2014) 八王子市南大沢における両生類の長期モニタリング-移植の試みとその後の定着過程 を中心に-. 八王子市史研究, 4：92-101.
- 草野保 (2016) 種分布モデリングによるトウキョウサンショウウオの好適生息環境の予測. 爬虫両棲類学会報, 2016 (2)：135-146.
- 草野保 (2020) 長期モニタリングで分かったアカハライモリの個体数. Caudata, 4：13-17.
- 草野保・植田健仁・初芝伸吾 (2001) 東京都におけるヒダサンショウウオとハコネサンショウウオの生息分布. 爬虫両棲類学会報, 2001 (1)：1-6.
- 草野保・川上洋一・御手洗望 編著 (2022) トウキョウサンショウウオ：長期調査で分かった個体群の衰退と絶滅. 東京都多摩地区における2018年度生息状況調査報告書. トウキョウサンショウウオ研究会：86pp.
- 照井滋晴 (2020) インターネットオークションで売買される国産イモリ類. Caudata, 4：26-29.
- 東京都環境局自然環境部 (2016) 東京都保全地域の生物多様性保全に向けた取り組み検討調査委託報告書.
- 東京都環境局自然環境部計画課・アジア航測㈱ (2008) 平成19年度東京都現存植生調査委託報告書.
- 東京都都市整備局 (2016) 平成28年度土地利用現況調査 (区部) データベース.
- 東京都都市整備局 (2017) 平成29年度土地利用現況調査 (多摩部) データベース.
- 日本爬虫両棲類学会 編 (2021) 新日本両生爬虫類図鑑. サンライズ出版：234pp.
- 林光武 (1993) ダンスを踊って求愛-アカハライモリ. 週刊朝日百科 動物たちの地球, 97：20-22.
- 福山欣司・草野保 (2013) 東京都におけるカエル類の生息状況の現状と課題. 爬虫両棲類学会報, 2013 (2)：111-127.
- 松井正文・前田憲男 (2018) 日本産カエル大鑑. 文一総合出版：272pp.
- 山本康仁・千賀裕太郎 (2012) 都市化により分断化された水田におけるトウキョウダルマガエル *Rana porosa porosa* の分布と環境要因の関係. 保全生態学研究, 17 (2)：175-184.
- 吉川夏彦 (2015) 最近の日本産ハコネサンショウウオ属の分類に関する雑記. 両生類誌, 27：1-8.
- Hase, K., Nikoh, N., and Shimada, M. (2013) Population admixture and high larval viability amongurban toads. Ecology and Evolution, 3: 1677-1691.
- Matsui, M., Misawa, Y., Yoshikawa, N., and Nishikawa, K. (2022) Taxonomic reappraisal of *Hynobius tokyoensis*, with description of a new species from northeastern Honshu, Japan (Amphibia: Caudata). Zootaxa, 5168: 207-221.
- Okamiya, H., Sugawara, H., Nagano, M., and Poyarkov, N. A. (2018) An integrative taxonomic analysis reveals a new species of lotic *Hynobius* salamander from Japan. PeerJ 6:e5084. <https://doi.org/10.7717/peerj.5084>.

写真提供者一覧 (両生類)

浦島淳吉、浦野守雄、草野保、小滝英俊、佐久間聡、東京都自然保護指導員、山崎文晶、(株)ゼフィールス